

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	梶田 祥嗣
論文題目	王安石政治思想研究
<p>審査要旨</p> <p>北宋の王安石は、政治家として知られるが、同時に詩人、思想家としても卓越した存在であった。彼の学派は「王学」と呼ばれ、北宋末から南宋初にかけて勢力を伸張する道学と拮抗した。道学から朱子学が登場し、国家的権威を獲得していったのに対し、王学は次第に消滅していく。王安石自身の思想も、王安石以後の王学の動向も、研究はまだ寥寥たるものであるが、その勢力と影響の大きさからして、宋代思想界の実態を究明するうえで必須の研究課題である。</p> <p>著者は王安石の政治思想を解明すべく、まず彼の『老子注』の分析を行う。王安石をはじめ、王雱、陸佃、呂恵卿らの所謂王学の徒はみな老荘の注を作成している。王安石の主著、主編は『三経義』（『三経新義』）であるが、著者はこの書を原理的に支えているものとして『老子注』があり、また王安石の皇帝観が極めて凝縮的に現れていると見る。従来王安石の『老子』への関心は、三教交渉の要素、新法との関係、独立した知的関心のゆえといった複数の見解があったが、著者はそれらを表層的議論に止まるとし、その上で王安石の『老子』解釈には、民に無為を求めたのではなく、人主の天下経営の考えが現れていることを指摘し、寺地遵氏の解釈を挙げつつ、聖人（人主と重ね合わされている）が無為と有為の両者に関わる存在であること、無の有用性を万物の主管者である聖人を通して証明しているとする。これは、聖人には上位者としてのあり方と、天下への役割との二方向が想定されているということであり、一方では本源である無が聖人の主宰者として権威の担保となり、他方では社会において礼を通してその有効性が現れるということである。そして更に王安石が「神」の概念を使用することに注目し、聖人の持つ「神」の融通無碍の神秘性が、皇帝が天下に関わりながら直接管理しないという主張に恰好の概念であり、これを持ち出すことによって皇帝の有為の世界とは隔てられた極致にある最高権威者としての面と、礼楽刑政の有為の体現者という面を矛盾させることなく説明することができたとする。</p> <p>また著者は、王安石の「中人の法」に注目する。この場合の中人は一般人のことであり、表面上は衆意を聞くようにみえながら、実際には君主の独断を掣肘する理論的根拠となっているとする。また王安石が、堯、舜の「舍己従人」、「元首叢脞」における無為の治、湯の「清浄無為」や文王の「不頭」といった王者の徳の内面への包摂を意味する経書の文言をクローズアップしていることを指摘し、そこに無為の思想の主張を込めていたと見る。王安石にとって皇帝とは修養の必要の無い絶対の聖性の具備者であり、天下の為政に対しては礼や法の最高権威者であるが、その具体的施行任務にあずかることはできない存在であった。神宗は、自己を文王になぞらえたかかる皇帝観に難色を示したのであり、従来一枚岩のように言われてきた神宗と王安石の間には微妙な齟齬が生じていったことを著者は指摘する。</p> <p>神宗と王安石のかかる微妙な関係を考えるうえで、著者は「国是」の問題を分析する。「国是」は劉向『新序』に出典を持ち、近年影響力の強い余英時『朱熹的歴史世界』で君臣協働を象徴する語として王安石が主張したとされたが、著者はかかる見方に異論を提出する。著者は神宗と王安石の関係は、当初からずれがあり、それが次第に表面化していたとする。「国是」は皇帝と士大夫が一致した方針というよりは、神宗と王安石が新法反対者に対してとりあえず持ち出したものであり、この概念だけでは両者の一体性を士大夫に納得させるだけの内実を持っていなかった。そこで王安石はより高次の普遍的理念として、『三経義』や『老子注』を通して「一道德」を唱え</p>	

たというのである。なお王安石自身は「国是」について発言していないということ、また「国是」は君臣協働を体現していると称して異論を封じ込める姿勢の表現として反王安石側が批判の対象にしている資料が主であることなどを指摘している。

第二章では、著者は王安石の学の継承として黄裳を取り上げる。黄裳は王学直門ではなく、その王学受容はあくまでも王学的経解や王安石門下士大夫との交流を通じてのものであった。また黄裳には神宗の学を顕彰する文言は散見されても王学を表彰するような態度は見られないが、その著述内容を見ると明らかに王安石の思想を継承し、しかもその学問は『周礼』をはじめ易経や老荘にわたるなど、王学の守備範囲を網羅していた。著者は、王安石と黄裳の『周礼』解釈を比較する。そして黄裳が王安石の『周礼』解釈の要と言える『周礼』の序列的構造と『字説』の意符による構造の相互的關係を自分の経解の基盤にすえ、さらに官僚における責任倫理の発揮まで盛り込んだことを指摘する。この『周礼義』と『字説』の相互連関に着目した経解は他の王学門下にも王学の対立者にも触れられることはなく、黄裳がいかに王安石の思想の核心に近づいていたかを示すものであり、黄裳の『周礼義』と「雑説」にはそれが現れている。また著者は、王安石と黄裳の異同について、王安石にとって重要な意味を持つ「太宰」に対する見方も比較する。総じて黄裳の思想は、表層は神宗の学でありながら、実態は王学という二重性があったとする。王学も一枚岩ではなく内部分派が見られていたことともかかる存在の指摘は注目に値しよう。

黄裳の文集の『演山集』は六十巻もありながら、完本ではなく、子孫の佚文収集である。しかも彼は文学方面での注目のみの存在であった。著者は『周礼訂義』、『周礼集説』、『礼記纂言』、『大学衍義補』、『周礼全経釈原』、『周礼註疏刪翼』、『欽定周官義疏』、『陳氏礼記集説補正』、『日講礼記解義』、『宋黄宣献公周礼義』などから黄裳の佚文の更なる収集を行い、その過程で黄裳のものが他者のものとして引かれているケースを複数発見した。本論文では紙数の関係で宋の王与之『周礼訂義』にしばって具体例をあげるが、そこでなぜこのような現象が起こったかの分析を試みている。ここで黄裳と混同されているのは反王学の永嘉学派の黄度であり、王与之もこの学派に属する。永嘉学派も王学も『周礼』を重視するのであり、永嘉学派は王学を超克する必要があったのではないかと著者は興味深い見解を示している。またこの学派の代表者の葉適は王安石批判者だが、彼の議論の中には明らかに王安石の影響があることを指摘する。これは問題提起にとどまっているものの、従来の宋代思想史観に大きな修正を迫ることを予感させる。

王安石は『周礼』をモデルにした制度の自立性を唱えたが、それでは皇帝がいかに位置づけられることになるのかという曖昧であった。著者はそれに一つの見解を示したわけであり、これは学界を裨益するものと言えよう。また王安石以後の王学の複雑な性格の一面を開示したことは、今後の更なる研究成果を予感させる。しかし王安石も重視する皇帝の人事権と無為の政治との関係はどうか、「国是」をめぐる対立の経緯の説明がこれでよいのかなどについては公開審査会でも問題になり、これらについては更なる検証が求められる。ただこのことを考慮しても本論文の意義は損なわれるものではなく、結論として本論文を博士学位授与にふさわしいと判断する。

公開審査会開催日	2019年 5月 11日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	土田 健次郎	中国近世思想・日本近世思想	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	森 由利亜	中国近世宗教思想	
審査委員	明治大学文学部・教授	垣内 景子	中国近世思想	博士(早稲田大学)